東京都・私立

明治大学付属明治高校・中学校

基礎学力向上

学力向上の施策を投入 社会で活躍できる力を育む付属校に

◎「第一級の人物たれ」が合言葉。旧制・明治中学校として千代田区神田駿河台の明治大構内に開校。2008年、同区猿楽町から調布市に移転し、男女共学となる。直系付属校で卒業生の大半が明治大に進学するが、ここ数年は国公立大への進学も増えている。

設立
1912（明治45）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約260人（高校）

2015年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、旭川医科大、筑波大、東京大、東京外国語大、東京工業大、横浜国立大、首都大学東京に7人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、法政大、立教大、早稲田大などに延べ21人が合格。明治大には 238 人が進学。他に、防衛大学校に2人が進学。

住所
〒182-0033
東京都調布市富士見町4-23-25

電話
042-444-9100

Web Site
http://www.meiji.ac.jp/ko_chu/

変革のステップ

背景
◎保護者も教師も生徒を伸び伸びと育てたいという意識が強いが、マイナスの側面として学力向上への取り組みは遅れがちだった STEP 1

実践
◎数学・英語を中心とした基礎学力の向上、生徒全員との校長面談による視野の拡大、英語プレゼン大会による表現力向上を図る STEP 2

成果
◎英語力が大幅に向上。明治大進学後、学部総代や学部長奨励賞を受ける卒業生が増加。国公立大進学者が増えるなど、進路実績も多彩に STEP 3

「付属校だからこそ、しっかり学習を」移転・共学化を機に始まった改革

明治大学付属明治高校・中学校の改革は、移転・共学化した2008年に始まった。

「付属校だからこそ、しっかり学習をさせて、大学に送り出すべきではないか。生徒は生き生きと高校生活を送り、潜在的な学力やプレゼンテーション能力も高い。それなのに、英語が出来ないばかりに、大学で持てる力を発揮できていない。生徒が大学で胸を張って活躍できるように、学力をしっかり付けて送り出すのは高校の義務です」

2009年に就任した金子光男前校長は、そう言って教師を叱咤激励したという。それは、明治大教授を兼務する立場故の実感から出てきた言葉だった。

複数ある明治大の付属校の中でも、同校の卒業生はほとんどが明治大へ進学する。そうした環境にいて安穏としてしまえば、緊張感は簡単に失われてしまう。広報主任の齊藤信弘先生は次のように話す。

「のんびりした学習環境から抜け出せないままの生徒も少なからずいて、教師の側も、生徒全員に学力を確実に付ける指導を確立できずにいました。一方で、ほとんどが明治大に進学するという進路実績だけでは、評価されないような状況も生まれつつありました」

データ解析により付属生の課題が明らかに

当時、明治大政治経済学部教授だった安藏伸治校長が、金子前校長からの依頼で同校の教員研修を行ったのは、それから間もなくのこと。安藏校長の専門分野は人口統計学であり、FD（＊1）の一環として、政治経済学部の全学生の出身校、高校時代の成績、受験した入試の形態、GPA（＊2）、取得資格、就職先や業種など、入学前から卒業後までの全てを追跡するデータを構築していた。そのデータを基に、付属校出身者の大学での状況について説明した。

明治大学付属明治高校・中学校校長
安藏伸治 あんぞう・しんじ
教職歴29年。同校に赴任して2年目。明治大政治経済学部教授。「自分より優れた人間を1人でも多く育てるのが教師の務めとして指導に当たる」

明治大学付属明治高校・中学校
吉田重幸 よしだ・しげゆき
教職歴32年。同校に赴任して32年目。国際連携主任。「様々な面で生徒たちが伸びる『キッカケ』を1つでも多くつくりたい」

明治大学付属明治高校・中学校
村松教子 むらまつ・のりこ
教職歴19年。同校に赴任して10年目。中学校生徒指導主任。「知らないことや初めての体験をたくさんしてほしい。一歩踏み出す後押しをしたい」

明治大学付属明治高校・中学校
齊藤信弘 さいとう・のぶひろ
教職歴17年。同校に赴任して12年目。広報主任。「自分には出来ないことも、生徒は出来るようにするために、自分が出来る指導を考える」

明治大学付属明治高校・中学校
本橋宏之 もとはし・ひろゆき
教職歴12年。同校に赴任して8年目。中学校教務主任。「為せば成る。諦めずに続けていけば、いつかはきっと良い結果に結び付く」

安藏校長は分析結果に驚いた。入試形態別で見ると、付属校推薦入試より学力面で低いのは、スポーツ推薦入試と他の付属校推薦入試だけだった。「付属校の中心である本校は、大学や社会でリーダーとして活躍できる人材を育成すべき」と、安藏校長は研修で教師に訴えた。

「基礎学力は大学の学習だけでなく、社会で活躍するために必要な力の土台となります。政治経済学部は文系ですが、就職先の多くは銀行や証券会社などであり、理系出身者と一緒に仕事をします。膨大なデータも扱うので数字に強いことが必須です。逆に、理系の学部でも研究職などに就けば高い英語力が必要になります。大学が求める力、社会で活躍するために必要とされる力について先生方に説明し、意識改革を促しました」（安藏校長）

推薦要件の改定、定期考査後の補習の導入で基礎学力を向上

改革の軸は基礎学力の向上だ。特に、付属生が最も強化すべき教科と言われた英語に力を入れた。英語の外部検定試験対策の講座を設けたり、外部検定試験を校内で受検できるようにしたりするなど、環境を整備した上で、明治大への推薦基準に外部検定試験の級・スコアを規定し、到達できない生徒は推薦しないことにした。

定期考査では、数学・英語で一定基準に達しなかった生徒に放課後補習を行った。各教科で約10人の生徒を指名し、教科書の復習やテスト問題の解き直しをさせた。補習終了まで部活動には参加できない。懲罰的に感じる生徒もいるが、なるべく重い雰囲気にならないように工夫していると、数学科担当の本橋宏之先生は言う。

「生徒が『分かった』という手応えを得て自信が付けば、次の定期考査への意欲も高まるはずです。ゲーム的な要素を取り入れるなど飽きさせない工夫をして、生徒が『学力が付いた』と実感できるようにしています」

また、数学では計算力向上に力を入れた。同校では、教師の作問による「漢字検定」「計算検定」を、年5回の定期考査に合わせて実施している。1～5級があり、漢字10分、計算20分。計算の内容は高校入試レベルだが、1・2級になると文章題になり、数学が得意な生徒でも1問に5分以上掛かる難問となる。合格率は2級で3割、1級は1割程度という。

数学では、試験前に検定の過去問題集を使って予習させ、基礎が身に付いていない生徒の個別指導を徹底したところ、模試でほぼ全員が全

＊1 Faculty Development の略。教員相互の授業参観、授業方法についての研究会など、教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称。
＊2 Grade Point Average の略。履修科目の評点に単位数を加味して算出する成績評価値。個々の学生の到達水準を測る目安に用いることが出来る。

国平均を上回る結果となった。

「数学の底上げを図るには、土台となる計算力の強化が必要だと考えました。数学が苦手な生徒も計算力が付けば自信になります。計算は方法さえ分かれば、1人でも取り組めるので、家庭学習につながるというメリットもあります」（本橋先生）

「皆で助け合い一緒に成長していこう」校長による全員面談で視野を広げる

進路指導も変化しつつある。国公立大であれば、明治大との併願を許可している。また、「大学4年間を含めた10年間で生徒を育てる」方針に従い、大学進学後の姿をイメージできるよう、高校と明治大との高大連携講座を開始。週1回、全10学部の大学教員が行う授業を受講し、生徒は自分たちの将来を模索する。

金子前校長時代に始まった生徒全員との校長面談も、生徒の視野を広げる上で大きな役割を果たしている。生徒数人と校長室で語り合うグループ面談で、14年度に赴任した安藏校長も引き続き実施している。話題は学校生活や学習状況、進路についてなど様々だ。中学1年生には学校生活のあるべき姿について語り、高校2年生にはしっかり学習すれば明治大以外の道も開かれると説く。そして、学年を問わず強調しているのが、「競争はするな」だ。

「生徒に意識してほしいのは、1番を取ることではなく、皆で助け合い一緒に成長していくこと。生徒には、競争に勝つことよりも、将来どんな研究や仕事がしたいのかを考えてほしいと思っています。それこそが、6年間を通してじっくり学べる付属校の良さです。5教科の基礎学力をバランスよく身に付ければ、将来の可能性が広がっていくことを知ってほしいと思います」（安藏校長）

英語のプレゼンテーションで文章力・表現力の向上を図る

同校では、論理的な文章力・表現力の育成にも力を入れる。「英語スピーチ・コンテスト」は中学3年生と高校1年生が英語のスピーチを3～5分以内、「イングリッシュ・プレゼンテーション」は高校2・3年生がプレゼンテーションソフトを用いて、英語で5～6分で発表するもので、「創立100周年教育振興プログラム」の1つとして始まった。文章力・表現力の育成に、探究学習の要素が加わっている。国際連携主任の吉田重幸先生はその背景をこう語る。

「明治大から、論理的な文章力を鍛えてほしいという要望を繰り返し受けていました。そこで、まずは自分でしっかり考え、相手に伝わる文章を書き、発表する力を伸ばそうと考えました」

いずれの大会も、生徒が自らテーマを決め、調べ学習をし、個別に教師のアドバイスを受けながら、日本語でアウトラインを作成した後、英語の原稿を作成する。「英語スピーチ・コンテスト」は6月に準備を始めて1月に開催、「イングリッシュ・プレゼンテーション」は前年度の3学期に準備を始め、6月に開催する。大会までに審査が3回ある。1次審査では、英語科教師が生徒全員の原稿を見て、各学年30人を選抜。2次審査で他学年の英語科教師が原稿を見て更に20人に絞り、3次審査のプレゼンテーションで、10人のファイナリストを選ぶ。そして、個別指導を経て、全校生徒の前で発表する。ファイナリスト10人には約2週間の海外研修が贈られる。

「イングリッシュ・プレゼンテーション」は、スライドを用いて発表するため、より論理性が求められる。春休みにテーマ決定に関する質問

写真　「イングリッシュ・プレゼンテーション」の様子。英語とスライドを駆使しながら発表する。優勝した生徒は、「これまでにないほど図書館に通い、英語の文献も調べた。スライド資料を作る過程で、1つの物事にはいろいろな見方や側面があることが分かったのが、一番の収穫でした」と語った。

会を行う他、地歴公民、理科、英語の教師と司書教諭らが、「ここは詳しく調べた方がよい」「ここは論旨がずれている」など、発表がより深まるよう支援する。原稿作成に充てる授業は2時間程度のため、生徒個々の意欲も試される。

プレゼンテーションの内容には年度ごとにテーマがある。14年度は「ライフ」で、「競走馬の安楽死」や「モデルの美しさ」などの切り口で発表された。発表後には、審査員を務めるネイティブの大学教員から英語で質問される。生徒ももちろん英語で答える。英語科の村松教子（のりこ）先生は昨年の大会を次のように振り返る。

「口ごもりながらも、果敢に自分の考えを述べようとする生徒もいれば、緊張のあまり泣き出してしまう生徒もいます。昨年のファイナリストの1人は、英語の学力不足が原因で留年した生徒でした。その後、一生懸命学習し、最後の10人に残った頑張りには驚かされました。自ら一歩を踏み出せない生徒でも、教師が背中を押すことで、予想以上の力を発揮することがあります。生徒が伸びるタイミングを教師が見逃さず、しっかり支援することが大切なのだと改めて感じました」

学力向上で大きく変わった付属生への評価

改革の成果は、明治大に進学した卒業生の活躍が示している。まず、英語力の向上だ。英語の外部検定試験の学年平均スコアは、09年度以降、毎年最高点を更新し続けている。更に、14年度には、大学在学中に公認会計士試験に合格した卒業生が7人出た。卒業生が大学卒業時の学部総代を務めたり、学部長奨励賞を受けたりすることも珍しくなくなった。また、他大学に進路の幅を広げた結果、東京大や旭川医科大など国公立大に合格する者も現れた。

今後の課題の1つは、海外に生徒の目を向けさせることだという。

「大学在学中に留学した卒業生と話をすると『高校時代に海外経験をしておけば人生が変わったかもしれない』と異口同音に言います。海外で英語の必要性や自分の英語力の低さを痛感したという卒業生も少なくありません。早めに海外経験を積ませ、英語の学習意欲を高めることで、生徒の力が更に伸びると期待しています」（吉田先生）

そして、進路先の多様化も課題の1つだ。

「『しっかり勉強させる付属校』というイメージは、受験生や保護者の間に浸透してきました。今後は、進路先を明治大に限定することなく、多様な進路の選択肢の中で、生徒が社会に出る10年後までを見据えた将来を生徒・保護者と一緒に考え、その実現を支援する学校づくりを一層進めていきたいと思います」（安藏校長）

若手教師が語る、指導変革への情熱

生徒がもっと伸びるよう指導の工夫を継続する

中学校教務主任 **本橋宏之**

私は明治大の数学科出身ということもあり、生徒に何より数学を好きになってほしいと思っています。そこで、定期考査後の補習では、ゲーム的な要素を取り入れました。8枚の用紙を配り、黒板に書いた問題をその用紙に解かせ、正解するごとに用紙を回収し、8枚の用紙が全てなくなったら部活動に行ける。そうすることで、多少なりとも生徒に楽しく取り組んでほしいと考えました。また、数学力の底上げのため、計算検定を活用しています。それらの取り組みの結果、2014年度の学力推移調査第2回では、中学3年生の数学の平均偏差値は62.8と非常に高い値を記録し、理系生徒の国公立大合格も増えています。

中学校教務主任の立場として、学校全体の指導力の底上げを図ることも、私の役割の1つです。前任校での経験を生かして導入した定期考査の振り返りシートは、中学校用のフォーマットを作成して、校内LANで全校に共有しています。高校でも、このフォーマットをアレンジして利用している先生は少なくありません。

今後は成績上位層をもっと伸ばして、国公立大の志望者が希望をしっかり実現できるように支援したいと考えています。そのためには、理系でも文系の科目、文系でも理系の科目の学力をしっかり付けることが重要です。各教科の先生と連携を取りながら、学力の底上げを図る施策を打ち出していきたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2012年6月号指導変革の軌跡「静岡県立静岡南高校」など
▶▶▶ http://berd.benesse.jp → HOME ＞ 教育情報 ＞ 高校向け